

あきた

# 直言温言

スポーツシーズンが本格化している。秋田のスポーツ資源を生かした地域活性化について考えたい。

本県は1961年の秋田国体をきっかけに、今日まで「スポーツ県」として隣県からも評価されている。4年前の秋田わか杉国体でも「スポーツ県」が健在であることを証明した。特に秋田のお家芸といわれるバスケットボールやラグビーは、地域密着型のチームスポーツとして人気が高い。

千葉 康弘

中国河北師範大客員教授

## スポーツ観光

### 震災復興の起爆剤に

スへの関心が高まっている。本県では、プロバスケットボールbjリーグに昨年から参戦した秋田ノーザンハピネッツの成果が目覚ましい。ホームゲームの観客動員数が都市部の大阪、東京を抜き1試合平均2258人、年間5万4188人でリーグ2位を記録した。今季の収入は黒字が予想され、県内への直も競技ができ、雪国秋田の地域

で企画することで、地域活性化への貢献も大いに期待される。来季から岩手県の新チームがbjリーグに参入する。東日本大震災で一時休止し復活した宮城県チームとともに、3県が連携し東北の枠組みで、復興支援を含めた広域的な取り組みも可能となる。

筆者は、かつて本欄でスポーツ立県推進のために、パッケージ型観光の構想を紹介した。健康と癒やしを軸に医療とスポーツをパッケージ化する考えだ。秋田に優位性のある素材を組み合わせることで、付加価値を高めようという提案であった。

直接的な経済効果も期待されるが、それ以上に熱狂的なファンであるフースターの広がりによる地域への間接・社会的効果は大きいだろう。来季への優先課題は、「強いチームづくり」という。スポーツ立県を唱える本県の起爆剤としての役割を十分に

特性と相性の良い屋内スポーツだ。県内各地にある公共体育施設で試合を行い、関連イベントや特産品販売も地元団体と共同

スポーツ資源(観る、する、支える)を最大限に活用し、国内観光振興を図る考えだ。宮城県でプロ野球の楽天、サッカードームの仙台が今季初のホームゲームを行った4月29日、村井嘉浩知事は「スポーツ観光を通じた東北復興のキックオフ」を宣言した。スポーツ観光による震災復興への国家プロジェクトの支援も是非必要だ。

観光にプロバスケットボール観戦を組み合わせたスポーツ観光は、本県が今すぐ実行に移すことのできる戦略だと思ふ。他のスポーツ団体とも連携し、秋田のさまざまな地域資源を組み合わせれば、魅力的な観光商品を開発することも可能であろう。国内外からの集客も夢ではない。



人々に心底から感動を与えられるスポーツ企画と観光を組み込んだ地域振興アクションプランを、官民一体でモニタリングして、本県から発信してはどうだろう。